

5. 令和：古から未来へ

医事万華鏡

新元号・令和が発表されました。出典は漢籍ではなく初めて日本の古典・万葉集であり、『初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後（はいご）の香を薫す」という文言からの引用であるとも公表されました。そして今、令和特需とも言うべき現象が日本に生まれていると聞いています。新たな御代が始まるこの時期に、多くの日本人が大和心（やまとごころ）について思いを馳せる良いきっかけになったように思うのです。

ただ一方で、中国をはじめとする一部の東アジアでは、元号を初めて国書から引用した日本の有りようを、押並べて「右傾化」であると揶揄しながら報道しました。こうした一部東アジア地域の日本に対する批判的な言説はいつものことだと慣れてはいるものの、何故自国の原点を大切に扱うことが右傾化なのか、どうしても違和感を覚えざるを得ないのです。国を愛することは、家族や故郷への愛の延長線上にあるものです。むしろ大人になっても自国を愛せない反抗期の子どものような状態の方がよほど問題でしょう。とどのつまり、そのような自国を愛せない人は他国も尊重できないはずだからです。

ところでその元号の典拠となった万葉集は、奈良時代末期に成立した日本に現存する最古の和歌集で、天皇や貴族等のやんごとなきお方だけでなく、下級官人や防人、大道芸人等、様々な身分の人々が詠んだ歌が含まれている点で特長です。美しい響きと古を思い起こさせる万葉集の世界全体には、生きた心、すなわち言霊（ことだま）が響いています。言葉には靈魂、命が宿っているという古の考えに改めて立ち帰り、言葉を大切に扱っていききたものです。

そんな新たな「令和」の時代に求められる医療はといえば、古と未来、すなわち医の原点と先端医療を統合した医療ではないでしょうか。いつの時代も医師たるは患者の心に寄り添うことが大切ですが、一方で最先端科学の恩恵を受けつつ新たな医療を展開し、それらを患者に提供することもまた求められています。とりわけ大きな可能性を秘めている再生医療については国を挙げて取り組み、そのための科研費の増額も検討すべき課題であると言えるでしょう。

令和という新たな御代の始まりは、世界中で不穏なニュースを見聞きする中で、久々の慶ぶべき知らせであったように思います。とはいえ、これを名実ともに良き「福音」として定着させるためには、各人それぞれの努力が必要となります。他力本願ではなく、未来の日本の国体を思い描き、そのビジョンを見据えた国づくりにより主体的に取り組んでいきたいと思います。それが新たな時代の『記紀神話』を紡ぐ糸となることでしょうか。

（JMS主幹・野村元久）

